

マリカ・モカデム : 砂漠からエクリチュールへ(後)

タイトル(その他言語)	Malika Mokeddem : du desert a l'ecriture (II)
著者	武内 旬子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	53
号	7
ページ	1-21
発行年	2002-12-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001174/

マリカ・モカデム

砂漠からエクリチュールへ（後）

武 内 旬 子

第3章 動くこと，書くこと

「書く女」の困難を前章で見たわけだが、その「書く女」は何よりもまず出発した女、出発を選んだ女である。モカデムの作品には、「出発」が重要な契機として様々な形式で書き込まれている。本章では、砂漠や家族、抑圧的なアルジェリア社会から脱出するだけでなく、外国移住がもたらす、二つの文化の狭間というもう一つの閉塞状況からも新たな出発を試みるそのエクリチュールを検討したい。

3—1 「養語」としてのフランス語

モカデムは母語の環境を離れ外国に在住し、母語以外の言語で書く作家である。フランスは古くから、外国人を多く受け入れてきた社会であり、フランス語は多くの、母語をフランス語としない作家を受け入れて来た言語である。イヨネスコやベケットを外国人作家と呼ぶ人はいないだろう。しかし、もちろん、フランス語を母語としない作家を数多く生み出したのは何よりも植民地主義の歴史である。その中には、自らの出身地にいながらにしてフランス語という「他者」の言葉で書く、もしくは書かざるを得ない人々も多い。また、現代の国際政治・社会状況は、フランス植民地主義の歴史と直接の関係をもたない新たな「亡命作家」（強いられた場合も積極的選択である場合も、フランス語で書く場合もそうでない場合も）をこの地に与え続けている。

フランス語の文学に限らず、亡命あるいは外国在住という状態と作家の仕事との複雑な関係は、現代の文学を考える際の重要なテーマの一つであることは確かである。受け入れ社会での生活に伴う様々な日常的困難（言語・習慣・宗教などの違い、経済問題、差別など）に始まり、出身社会との関係（出発の理由、断絶の度合い、帰国の可能性など）、さらに何語で書くかという、作家の仕事の根幹に関わる問いなど、この現象を取り巻く問題は多岐にわたっている。¹

あるインタビューでモカデムは、「私は自分が亡命者（exilée）だとは感じていません。私は外国居住者（expatriée）なんです。（中略）国境を越えるのは私には解放でした。祖先が遊牧民だからかしら……私は、亡命というのは領土ではなく家族、部族との関連で定義しています。年がら年中亡命を嘆いている人にはうんざり²」と述べている。他のインタビューで自分の状況を亡命（exil）という言葉で表現している場合も一度ならず見られるが、³ 強いられた、嘆くべき亡命状態にあるとは考えていない。むしろ「私にとって亡命とは、あなたをいつも国境の向こう側へ送り返す他者のまなざしの中に存在する⁴」のだし、あるいは国境を越える前、すでに「知は最初の亡命⁵」なのである。

では言語と亡命あるいは外国在住の関係、あるいは母語でない言語で書く問題を、この作家はどう考えているのだろうか。一般にフランス語で書くマグレブ出身作家のおかれた状況の複雑さはよく知られている。1976年からフランスに政治的亡命者として暮らすチュニジア出身の詩人で、アラブ語、フ

1 たとえば、国際作家議会（1994年創設のNGO）のような組織はヨーロッパ各地に「避難都市」を設定し、作家を受け入れて生活と仕事を支援するという具体的な活動を行っている。また2001年12月にはパリのボンピドーセンターにおいて「インクと亡命」というタイトルの大規模な国際会議が、同センターの情報公共図書館主催で開催された（フランス語以外の言語で書く作家やフランス以外に在住の作家も多く参加）。

2 ALA, No.14 1997, p.194.

3 c.f. *Le Soir d'Algérie*. 29 décembre 1991, *El Moudjahid*. 25 juin 1992, ALA n.14 1997.

4 *Encres vagabondes*, ibid.

5 『夢と暗殺者』第5章のタイトル。

6 その後政情の変化により89年に初めて帰国、その後は定期的に帰国しつつ、フランスに生活する。

ランス語の双方で作品を発表しているタハル・ベクリが、マグレブ作家という、その作品が何をいわんとしているかは無視され、いつも言語問題ばかりが語られることにうんざりしていると述べるほどに⁷。しかし、そのタハル・ベクリ自身、別の箇所では、書くという行為自体「白い紙との、愛、欲望、快楽、暴力にまで至る悦楽、苦痛、疲労、自己の不在、喪失、他者における存在などなしにはありえない取組み合い」⁸なのだから、「ましてやそれが、歴史を通して、抑圧的、屈辱的、人を傷つける言説の重みを担ってきた言葉である場合何をかいわん⁹」と、苦い思いを吐かずにはおれない。ベクリの場合、独立後の自国を追われてかつての植民地支配国に生きざるを得なかったという事情はあるが、一貫して二言語教育を受けアラブ語でも書いている。チュニジアあるいはモロッコと異なり、アルジェリアは最強度の植民地支配の犠牲となり（植民地の中でもフランスの一県として併合されたのはアルジェリアのみ）、アラブ語教育の伝統が大きな打撃を受けたこともあり、さらに無数の犠牲者を出した戦争によって独立が勝ち取られた歴史を考えると、ことはいっそう深刻さを増す。カテブ・ヤシンがアルジェリアにとってフランス語は「戦利品」とであると述べるのはもちろんこの過程をふまえてのことであり、多くのアルジェリア作家がこの言葉をくりかえし引用することからも、この言語との葛藤が理解されるだろう。

ところで、モカデムの、フランス語との関係の特徴はむしろ、その葛藤や違和感の少なさにあるといわざるを得ない。もちろん1949年生まれの作家がこの問題に全く無神経でいられるわけもなく、92年のインタビューでは「フランス語はまず外国語、軍服の言葉、恐怖の言葉」¹⁰であったと述べているし、『歩く人々』にも「彼女が選んだのではないこの言葉（HM 125）」という一

7 Pierre Soubias, "Entre langue de l'Autre et langue à soi", in Christine Albert et al. *Francophonie et identités culturelles*, Karthala, 1999, p.135. Soubiasの引用による。

8 Tahar Bekri, "Ecrire en deux langues ou le principe des vases communicants", in *Le Maghreb Littéraire*, vol.IV, n.7, 2000, p.99.

9 *ibid.*, p.100.

10 *El Moudjahid*, 25 juin 1992.

節がみられる。しかしこの引用は「(この言葉を) 彼女は愛し始めていた (HM 125)」と続く。フランス語との関係に曖昧さはないのかと問うヘルムに対して「全然! まったく!¹¹」と全否定する作家が用いるのは母性の比喩である。前章でみたようにモカデムと母、あるいは母性との関係は必ずしも穏やかではないが「自分を養ってくれた胸に噛みつくことはできないと思うの。自分の中にある何かを裏切ることはできないって¹²」とこの対談でも述べ、最新刊のフランス語作家インタビュー集でも「私はこの言葉と完全に愛情に満ちた関係をもっています。それは本当に私にとって母の胸だったのです。私を養ってくれたのはこの言葉です¹³」と断言している。前章で述べたように伝記的事実としての母の言葉を何よりも命令と抑圧の言葉ととらえ、人生のモデルとして母を拒絶するエクリチュールを再創造しようとする作家は、別の、あるべき母、愛情に満ち豊かに養ってくれると想定される母の言葉をフランス語に見出すのである。

同じインタビューで彼女はさらに、アルジェリア人作家にはこの言葉との関係が難しい人がいることは知っているが自分には「フランス語を否認することは絶対できません。私の一部なんですから。私のアイデンティティの一部なんです¹⁴」と調和した関係を強調する。おそらく、個人としての「亡命」が比較的順調であったように、「私の中へのフランス語の亡命と私のフランス語への亡命は混じり合い、苦楽をともにすることを互いに誓う¹⁵」と、彼女のフランス語との「結婚」もまた苦悩や葛藤よりは愛情と理解の方に恵まれているといえるのかもしれない。¹⁶モカデムの作品に、言語選択上の葛藤を読みとろうとするのは、それこそ「期待に基づく誤読」になりかねない。もちろん、こうした強調自体が「不幸な結婚」の無意識のカムフラージュではな

11 Helm, op. cit., p.42. 1998年の対談。

12 ibid.

13 *La langue française vue d'ailleurs*, Tarik Edition, Casablanca, 2001, pp.81-82.

14 Ibid., p.82.

15 *El Moudjahid*, op. cit. 引用の後半は結婚式での宣誓の言葉のもじり。

16 ちなみにモカデムの配偶者はフランス人で、彼女はフランス国籍を取得している。

いかと問い、テキストの亀裂を探して、作家の意識しない葛藤を露わにすることもおそらく不可能ではない（たとえば母性の比喩などは格好の入り口になるかもしれない）。フランス語が外国語だからこそ、まず、問題のなさ、あるいは逆にその存在の主張から始めねばならない（フランス語を母語とするフランス人作家であれば、直接、ベクリの言う取っ組み合いから始めることができる）という事情はモカデムの場合も同じなのだから。しかし、ここではこの「調和」を別の面から問いたいと思う。外国（語）とのこの関係を可能にする条件は何なのかと。

最初に指摘したいのは、全く「外的」な伝記的事実、モカデムが医師だということである。作品中に医師の登場する割合が比較的多いことを除いて、このことがテキスト自体を直接決定していると言いたいわけではない。しかし、フランス在住のアルジェリア人作家であるというもう一つの伝記的事実と考え合わせる時、この要素は、決して無意味ではない。医師という職業のもつ社会的地位は、同じアルジェリア人でも一般の移民労働者の場合に比べより恵まれた経済的条件と社会的認知を与え¹⁷、またその普遍的性格は他の「文系」知識人の亡命者に比較しても、より大きい安定を可能にするだろう。この分野においても存在する人種・性差別にもかかわらず¹⁸、職業能力上フランス人と対等にやっていけるという自信は、少なくともモカデムの場合、作家としての言葉との関係においても肯定的に作用している。むしろ、彼女の場合、何語で書くか、よりも、書くかどうか、つまり腎臓病専門医としてのキャリアをとるか、作家の仕事を優先させるかの選択がより決定的なものと

17 ただし、これも、モカデムがフランスで医学教育の仕上げと専門化をおこなったという事情によるところも大きい。というのは、フランスの病院では、現在、フランスの医学教育システムを採用している旧被植民地国の出身でフランスの医師免許をもたない医師が数千人働いているといわれるが、彼らは事実上フランスの免許保持者と同じ能力を認められて同様に働いているにもかかわらず（人によっては10年、20年という期間、はるかに低い報酬しか与えられず、夜間勤務などを重ねざるを得ない。2001年秋には、フランスの病院機能を底辺で支えている彼らのストライキがあり、マスコミでも報道された）。

18 インタビューなどで繰り返しモカデムはその事実を指摘している。たとえば Helm, op. cit. pp.48-48, *Encres vagabondes*, op. cit など参照。

してあったように思われる。そして書くという、「はるかに強い情熱」¹⁹が選ばれた時、この情熱を養い実現する「養語 (langue nourricière) (NZ 16)」は、フランス語でしかありえなかったのである。

もう一つのより重要な条件は、出身文化との関係に探らなければならないだろう。ショーレ＝アシュールは、モカデムのフランス語との「リラックスした関係」²⁰の理由を「フランス文化以前に獲得された文化の安定化作用」²¹に見ているが、ここでは特に、祖母を通じて伝えられたを移動の価値化という視点を重視する必要があると思われる。孫娘が海を越えて「亡命」する前にすでに祖母は定住生活への「亡命者」ではなかったか。この文脈では、出発すること、移動することは、祖母あるいはその象徴する一族の伝統を引き継ぐことに他ならない。すでに見たように『歩く人々』における祖母の語りは、失われた出発の代用でもあり、その内容も、出発した者、絶えず出発する者への賛歌である。家族や周囲の圧迫に息を詰まらせるレイラに、遊牧民のキャラバンに合流してはどうかと勧めるのも祖母である。²²出発は、従って、出身世界との断絶を意味するよりはむしろ、いったんとぎれた祖先の動きを別の形で再開することなのだ。モカデムの作品世界が常に、未知を恐れずに出発するもの、とりわけ出発する女性を描き、アイデンティティ不安の問題を中心的テーマの一つにしながらも、それを語る言葉の「リラックス」度をすら指摘できるのは、出発という行為自体への全面的な同意がテキストを支えているからではないだろうか。

とはいえ、出発は常に容易なわけではない。伝統に従い、一族の枠に守られた遊牧民の移動と異なり、モカデムの主人公たちは、常に新たな出発を再創造していかなければならず、またそれに伴うアイデンティティ構成の問題をた

19 Helm, op. cit., p.49

20 Chrisatiane Chaulet-Achour, "Le corps, la voix et le regard; la vune à l'écriture dans l'oeuvre de Malika Mokeddem", in Helm, op. cit., p.207.

21 ibid.

22 c.f., HM p.11, Helm, op. cit., p.29.

23 HM p.278, pp.295-297.

えず立て直していくことを余儀なくされる。にもかかわらず、出発すること、動くこと自体が困難の原因として批判されることはない。定住が足元を捕らえる死なのだとしたら、出発と移動こそが生なのである。

3—2 出発した者たち

『歩く人々』と祖母の語りについてはすでに何度も言及してきたが、その全体は孫娘の出発がいかに希求され、準備され、実行に移されようとする（フランス行きを示唆して終わる）かの物語でもある。続く『イナゴの世紀』ではリアリズムではないにせよ「遊牧生活」が物語の主要部分を占め、最後はヤスミンの「放浪詩人」としての人生を暗示して締めくくられている。海を越える移動を体験した人物が初めて前面に出るのは第3作であり、またそれは、6作中最も「引き裂かれた」主人公の物語でもある。

二人の中心人物スルタナとヴァンサンの一人名の語りが一章ずつ交代する形式自体、二つの極の出会いや補完関係を体現する役目を担っているが、この二人はそれぞれ異なった形で、自らのアイデンティティ問題と直面する人物である。ヴァンサンが腎臓移植を受けた患者として設定されているのは、作家が腎臓病専門医であるという理由以上に、自分との同一性をそもそも「物質的」レベルから始めて問うための仕掛けなのだ。移植はヴァンサン個人にとって、まず、「生き延びるための絶対条件」²⁴に他ならないが、何度も現れる“*intégration*（同化・統合）”や“*tolérance*（許容・耐性）”といった語は、テキストを医学と同時に社会問題の領域と接続させずにはおかない。『追われた女』は直接移民問題を扱う作品ではないが、現代フランスでそれを語る時に頻繁に用いられるこれらの語を通して、社会レベルでの「移植」を見ないことは不可能である。移植された臓器なり、移住してきた隣人なりを受け入れることは、アイデンティティの変更を受け入れることでもある

24 Christiane Renaudin, “Guérir, dit-elle”: le double pouvoir de la médecine et de l'écriture”, in Helm, op. cit., p.228.

（「(手術後)意識の戻った最初から他者がそこにいた (I41)」)。フランス人男性ヴァンサンは、自分の中にアルジェリア出身女性の一部が存在すること、二重、三重に他者であるその存在なしに自分が生きられないことを知っている。ヴァンサンのアルジェリア行は、今や自分となった他者のオリジン探求の旅であり、²⁵ 砂漠の縁でもう一つのオリジン探求の旅（スルタナのそれ）と絡み合う。

ヴァンサンの移植が「完全な組織的一致 (I39)」と「すばらしい許容性 (I42)」に恵まれた成功例なのに対し、スルタナの求める自分との一致は不安と摩擦に満ちた行程として表れる。

「私はむしろ中間 (l'entre-deux) にいるの。境界線の上、あらゆる断絶の中に。謙虚さと、反抗を押しつぶす軽蔑との間に。拒絶の緊張と、自由がもたらす散乱の間に。不安という疎外と、夢や創造による逃避の間に。北と南の連結点を探し、二つの文化に指標を探す中間状態にいるの (I65-66)」

ロベール・エルバスはこの部分を引いて「(スルタナが) あまりにも自分自身から疎外されているので、償いの可能性一切なしに、生きがたい狭間に落ち込んで茫然自失している」²⁶ ことの例証とする。この小説が、亡命状態にある者一般の、回帰の欲望とその不可能というテーマを追求していることはたしかだが、「償いの可能性」²⁷ が一切ないことをのみ語っているわけではない。その一方、ニコル・アアス＝ルパリの提示するダリラという人物を通し

25 ただし提供者については27歳のアルジェリア出身女性という以上の情報はヴァンサンにも読者にも与えられていない。

26 Robert Elbaz, "Entre mémoire et subversion: vers le dépassement de l'entre-deux négationnel chez Malika Mokeddem", in Beate Burtscher-Bechter et Brigit Mertz-Baumgartner (direction), *Subversion du réel: stratégies esthétiques dans la littérature algérienne contemporaine*, L'Harmattan, 2001, p.223.

27 エルバスがここで用いている、キリスト教へのコノテーションがきわめて強い *rédemption* という語が適当かどうかについては疑問の余地があるように思われる。

てスルタナが再生するという予定調和的読み²⁸も、このテキストにおいて、狭間とアイデンティティの問題をめぐる緊張感の高さが最後まで維持されることを考えると不十分に思われる。

回帰の問題のうち、封印された子供時代の回復に関してはすでに述べたようにある種の解決が用意されているのだが、それだけでは自己に一致する回帰が成し遂げられたとはいえない。スルタナの場合、生まれた村からの最初の「出発」は追放に近いのだが、『追われた女』が現代の物語として語る回帰もやはりほとんど追われる形の再出発に終わる。しかしこの二つの出発は同じではない。最初のそれが、自分自身がその一部を成していたはずの共同体から、異分子として一方的に排除される追放であるのに対し、2度目のそれは過去の一部と和解した上で、和解できないものを確認した脱出である。家に火を放たれての脱出が幸福なものでないのはたしかだが、そこには状況を見通すスルタナの視線があり、彼女が再出発という選択を、苦い思いはありこそすれ自ら引き受ける時（「私が生き延びられるのは移動（déplacement）の中だけ、移住（migration）の中だけ（I 234）」）、そこには、茫然自失や敗北とは異なる、出発の価値化が認められる。ヴァンサンが、他者を受け入れることによって再生したように、「境界線上の存在」は、『追われた女』において、追放の結果としてではなく、新たな選択として再生するのである。そしてそれは、過去の定点との一致をめざすのではないアイデンティティ探求へと向かうだろう。

移動の中でたえず更新されていくアイデンティティというテーマは最新作で新たな展開を見るのだが、その前の2作においてもいくつかの可能性が試みられている。『夢と暗殺者』では、オリジン探しの方向が逆転する。マグレブ出身作家、あるいは移民2世代の作家の作品で、オリジン探しといえ

28 C.f. Nicole Aas-Rouxparis "Interdiction et liberté dans *L'Interdite* de Malika Mokeddem", in Helm, op. cit., pp.107-171. デメテルとペルセフォールの神話を逆転させ、母（オリジン—過去）との必要な断絶の後、娘（ダリラー—未来）を通してスルタナが救済されるという図式による読み。

ば、南下が通例であるが、『夢と暗殺者』の主人公ケンザは母親探しに地中海を北に渡る。さらにケンザにとってフランスは最終目的地でもない。この小説はケンザのフランスから次の場所への出発で終わる。移民が押し寄せると恐怖するフランスにとって、「第三世界」、とりわけ旧植民地の人々のオリジンは完全に外部にあるものであり、同時にフランスが彼らの羨望する最終目的地であることに疑いの余地はない。『夢と暗殺者』はこの確信にあっさり肩すかしを喰わせてみせる。ケンザの母探しの相棒ともなる少年スリムについて言えば、彼は自らのアイデンティティを「半分マリ人、半分アルジェリア人、半分フランス人 (RA 137)」と表現する。この奇妙な計算は数学的には成り立たないかもしれないが、三極による安定を彼に与える。引き裂かれたところか、非常にのびやかな人物として少年は、いささか図式的なこの作品の中でなめらかに動き回る（そのアトリビュートはスケートボード）。彼の夢は、ケンザが予想するようなアフリカへの父探しの旅ではなくヨットで世界の海へと滑り出していくことなのである。

『夢と暗殺者』の後、モカデムのエクリチュールは海へ向かう（『ンジド』）前に、いったん砂漠へと迂回する。『亀裂の夜』のヌールはアルジェリアの砂漠地方から出ないが、動かないわけではない。モカデム世界の、ゾフラと並ぶもう一人の停止したノマドと呼べるかもしれない。また、ヌールはモカデムの女性主人公のなかで唯一、文字を読まないが、ゾフラのごとく、彩り豊かな口語表現を持つ。遊牧民の共同体に属していたヌールは、子供のできないことを理由に二人目の妻を娶ろうとする夫のもとを去り、孤立した移動民となる（遊牧生活を送るわけではない。現実的というよりは多分に寓話的な作品である『亀裂の夜』は、実際このような生活が可能かどうかは問題にしない）。そしてある日、舞台となる村に到着し定住する。『亀裂の夜』においても『夢と暗殺者』に見られたオリジンをめぐるある種の逆転を指摘することができる。というのも、この村は水源の枯渇と砂漠の進出のせいで次々住民が逃げ出し、残っているのは盲目のサシと、よそ者のヌール二人だけな

のだ。地元民が放棄したオリジンの場を今や、後から入り込んだよそ者が占めるわけである。しかし、停止したノマドはゾフラがそうであったと同じく、停止した地点で死を迎える。砂の地平線に目を見開いたまま。この死を、バシオルのように、最後まで精神的にノマドであり続けることの証のごとく読みとるべきだろうか。²⁹ たしかにヌールは自立した女として規格外の生き方を選び、また病院に閉じこめられることを拒否して孤立した、砂漠に直面した死を選ぶ。しかし、たとえ絶望や悲嘆とは無縁の静謐な終わりであっても、ゾフラの場合と異なり、まだ若いヌールの死がそのまま未来へ開かれると、バシオルに従って肯定的に解釈するには無理がある。むしろ砂漠で完結する移動はもはや不可能なことを『亀裂の夜』は示唆していないだろうか。少なくともモカデムが探求する、移動と多極化による、より自由なアイデンティティ構成は、寓話的にも砂漠だけでは見いだせない。再度、砂漠から出ることが必要になるだろう。

3—3 海のノマド

最新作『ンジド』は、そのアイデンティティ構成の複雑なありかたを、ミステリー仕立ての筋書きをも動員して語ろうとする。冒頭、女性主人公は、海上でたった一人、記憶喪失状態で目を覚ます。この設定は、アイデンティティを洗い直す作業の、一つの極端な形を可能にする。海上という、国籍や共同体への即時の帰属から一定距離をおける状態で、ヒロインに最初に与えられるのは、偽であるという注意書きを伴ったパスポート、従って偽の名、生地、住所などである。書類が保証するはずのこうしたアイデンティティの「あやしさ」がまず出発点に置かれる。航海日誌は地中海上の船の位置について、より正確な情報を与えるが、「(ミリアム・ドールという偽の名は) 彼

29 c.f. Bacholle, op. cit., pp.76, 77, 79. バシオルは、サシについても、ヌールを定住化させ、禁止や服従からなる闇の世界—男性的秩序に従属させようとする人物と評価するが (ibid., p.80) これは二人の関係を誤読するものであろう。サシの盲目性は決して否定的闇としてのみ書かれてはおらず、またサシがヌールにいだく思いは、むしろ伝統的な男性権力のあり方とは異なる愛の形として描かれていると考えられる。

女に両岸のどんなアイデンティティをも開くことが可能だ (NZ16)」。この特殊な状況がもたらす言葉との再接触も、開く方角は一つではない。まず「彼女には一つの言葉が残っている。書き置きの、偽書類の、海図の、書棚の本の (NZ16)」と書かれる言葉はフランス語だが、ラジオに入る様々な言語のうち、「アラブ語は彼女を奇妙にゆさぶり (NZ29)」「英語は同じやさしい暴力で彼女をなぎ倒す (NZ29)」。スペイン語とイタリア語は気を静めてくれ、押し寄せてはこない。リース・ゴヴァンはフランス語圏文学をめぐる論集の中で「ここには何一つ自明なものはない。彼 (フランス語圏の作家) にとって言語とは絶えず再征服するべきものなのだ³⁰」と述べている。ゴヴァンはここでフランス語圏の作家一般を問題にしているのだが、『ンジド』の主人公もまた、この作家たち同様、何一つ自明なものがない状況で、自らの言語と自分とがどういう関係にあるのかという問いから始めなければならない。アイデンティティが一言語に直結する、もしくは一言語がアイデンティティを保証するという発想から遠く隔たった場に、『ンジド』は主人公と読者とを置くのである。最終的に主人公と読者が本名 (ノラ・カーソン) や出自 (アルジェリア人の母とアイルランド人の父との間に、フランスで生まれる) などを再発見するとしても、この、最初に問われた問いは、二度とアイデンティティを自明なものとして固定することを許さないだろう。『ンジド』の語りは3人称が基本だが、ヒロインが2人称で自分に語る部分はイタリックで記される。そこで「あなた」は失われた「私」であり、「私」は記憶を、私自身を捜すものである。この分裂は特に前半で顕著であり、記憶が回復するにつれて減っていくのだが、ヒロインが (彼女は自分に2人称で呼びかける存在に次第にいらついていく) 本名を再発見した後も完全に消え去ることはない。

ところでノラは画家、漫画作家として設定されており、言葉の介入なしに、

30 Lise Gauvin, "Ecriture, surconscience et plurilinguisme: une poétique de l'errance", in Albert, op. cit., p.16.

手を動かし、絵を描くことで取り戻される記憶もある（たとえば、男性の肖像をかいてしまってから、それが父であることを認識する）。子供時代を思い出す過程では、絵が、英語（父）アラブ語（母）フランス語（社会）の中から一つを選ばない方法だったことが示唆される。多言語、多文化の合流、衝突、干渉地点としてあることは、決して常に快適であると図式化されてはいない。言葉のかわりに絵を選ぶ子供は、心身症の湿疹を全身にまもって生きにくさを表現する子供でもあるのだ³¹。再度記憶の黎明期に立つノラは、漂うクラゲとして自己表象し、「漂流物の共同体（NZ 22）」に属することを主張する。しかし、「地上では過去をもたないことが全てを押しつぶす（NZ 64）」こと、「どこの者でもないことなどできない（NZ 64）」ことを、この記憶喪失者は忘れていない。外国人であること以上に、「一つの帰属を述べ立てないことはあやしい、拒否のかどで有罪（NZ 192）」なのだ。

しかも『ンジド』は、疑問の余地なき帰属に対する憧れにも目を閉じはしない。多極のアイデンティティを称揚するディスクールはいつも説得力を持つとは限らない。たとえ恋人の言葉であったとしても。

「何度ジャミルは、彼女が三つの土地の出身で、あらゆる土地を越えた存在、より大きな自由の、海と大気と創造の自由の中にいるんだと彼女に繰り返したことだろう。説得しようとする断固とした調子にもかかわらず、彼女はジャミルやジャン・ロランの中にしっかり根をおろした祖国への愛に嫉妬し続ける（NZ 207）。」

帰属への憧れと、それを強制する社会に対する反発との間の対立は解決をみない。小説の題名にもなっているアラブ語表現 “N’zid”（Je continue/Je nais「生まれる」と「続ける」を同時に意味する）の持つ「始まりと継続の

31 もちろんこれは、単純に言語が複数である結果なのではなく、主に両親の関係の複雑さに起因すると考えられる。

両義性を彼女は愛している。彼女のアイデンティティの本質でもあるこの不協和音を、彼女は愛している (NZ 160)」ように、テキストも不協和音を残す。

筋としてノラの身元や記憶を失った直接の理由は解明されても、ジャン・ロランをめぐる謎は残り、サスペンスは宙ぶりのままである。また、ノラの回想や他者の言葉の中にしか登場しない人物の多いなかで (両親, ジャミル, ジャン・ロラン), 実際に彼女と接触し、その記憶回復過程に伴走するのはロイックだが、この人物もまた未解明のカテゴリーに入るだろう。二人の船は港で偶然隣り合うのだが、その時から、一定の距離を置きつつロイックはノラの船を追い、独自の判断での調査すら行い彼女の記憶回復を助ける。ちょうどテキストの半ばで、彼女に本名を手渡すのはロイックである。しかし、彼自身はほとんど自分の過去を明かさず、ノラに話す断片的な物語が「真実」なのか「フィクション」なのかはわからない。『ンジド』は、回想されるのでない登場人物として、ほとんどこの二人しか持たず、偶然の出会いに始まるある種のラブストーリーと読むことも不可能ではない。ただしノラの方は自分のアイデンティティ問題に手一杯で、ロイックの方が追う立場にあるというのは、船の位置ばかりではないが。しかしテキストは、ようやくノラが記憶に取り戻した恋人ジャミルの暗殺を知るところで終わる。ショック状態のノラにどうしたいかと訪ねるロイックに彼女が返す “N’zid” という答えは、そのまま、生まれつつあるこの二人の関係にもあてはめることができるだろう。

ノラの頭部レントゲンを見た医師は「皮質 (cortex) に少しぼんやりした部分 (NZ 58)」があることを指摘する (彼女は頭部を強打されて記憶を失う)。ノラはこの “cortex” という語から言葉遊びを引き出す。

「cortex に曖昧な箇所。変な言葉ね、cortex て。Corps-texte (体—テキスト), そうだわ。あなたの体には曖昧なテキストがある……

(NZ 61)。」

ノラの頭部同様、『ンジド』もまた曖昧な箇所を持つテキストである。しかし、医師の目には問題があってもノラが動き続けるように³²、テキストも曖昧さにかかわらずダイナミックに動き続ける。彼女の乗る船がほとんど常に航行し続けるだけでなく（寄港はしばしば一泊にも満たない）、彼女自身、たえず活動状態にある。記憶を取り戻そうという精神的努力がたえずテキストを押し進めるだけでなく、操船の動作や水泳といった肉体的活動も、単なるエピソードではない。船を一人でコントロールする女性、不安や動揺をかかえつつも、状況を的確に判断し、機敏に行動に移る人物を核とするこのテキストには、自立した女性のイメージを、さらに、書く行為自体のメタファーを読むことが可能である。

記憶は、またそれと不可分のアイデンティティは、意図的に獲得あるいは回復されとは限らない。本人の意識や意志と必ずしも呼応せずに、他者から与えられるものでもあるのだ。『ンジド』においても、この受動性は様々な形で演出される。だが、それは同時に、動きを前面に出すこのテキストにおいてきわめて能動的な過程としても描かれる。アイデンティティは結局、他者とのダイナミックな相互関係によって、他者と共に作られていく他ない。書くこともまた、船を操るように意志的行為である一方、風や波といったコントロール不能の力にたえずさらされる。テキストの記憶は書くことによって作られていくのだから、作家の仕事は一作ごとに毎回、記憶を失って海上で一人目を覚ますところから再開される以外にありえないのかもしれない。

『ンジド』のエクリチュールは、モカデムの作品の中で最もゾフラの言う「言葉のノマディズム」に近いともいえるだろう。単に砂漠が海に舞台をかえただけではない。閉塞空間でもあった砂漠を脱出したモカデムは、書くこ

32 『亀裂の夜』のヌールと同じく、入院の必要を説く医師を後目にノラは逃げ出す。

とで自らの砂漠との関係を再創造する。さらに「亡命」と「中間状態」の暴力をも体験した作家は、二項の狭間に宙づりのまま固定されることを拒否し海へ出る。どこにも帰属せずすむユートピアを求めるためではない。多極のアイデンティティを再構成する（なぜならそれは常に構成しなおされるものだろうから）別の方法、別の道を探すために。そして彼女が動き続けることを可能するのは何よりもエクリチュールなのである。

おわりに

「私は外国語を豊かにしている」³³。センベヌ・ウスマンのこの言葉は、かつての支配者の言葉で書く旧植民地出身作家の脳裏を一度はよぎったことがあるにちがいない。フランス語圏と呼ばれる地域で書かれる文学は、あるいはその地域出身の作家がフランス語で書く文学は、結局「本土」を、フランス文学を豊かにすることにしかないのだろうか。

20世紀最後の10数年に、かつての植民地（今もフランスであり続けるアンティル諸島を含む）出身のフランス語表現作家の活躍は周知の事実となった。将来書かれるであろう20世紀文学史がこの時期を扱う際に、これらの作家に触れずにすませることはもはや考えられない。この文学が、フランス文学史の中で正当な位置を、アリバイ的なそれではない位置を占めるようになるのだろうか。それとも、それぞれの出身国のナショナルな文学として「独立」し、フランス文学という枠組みを出ることこそが求められるべきなのだろうか。あるいは、フランス語で書くという現象自体が植民地主義的文化支配の一形態として消滅すべきなのだろうか。いずれにせよ、フランス語圏文学やフランス語表現文学とよばれるカテゴリーの文学の読者や研究者は確実に増えている。これらの文学をフランス文学の当然の一構成要素、それも次第に重要性を増していく要素としてみなす読者が増えることは、フランス文学自

33 Sembene Ousman, *L'Harmattan*, Présence africaine, 1963, p.71.

体の定義に変更をせまっていこう。ラテン語に対して常に自己主張する必要のあった時代から、何がフランス文学なのか、実は自明であったことなどなかった。各時代に、書き手と読み手の共同作業は、文学の輪郭をたえずずらし続ける。そもそも、ある言語の「外」との関わりなし存在する文学はありえない。今日、「外」に属するものあるいは「外」から来たものとみなされるこれらの文学も、望むと望まないとにかかわらず「内」を変貌させずにはおかない。とりわけそれが、質の上でも量の上でも、無視できる範囲をはるかにこえている場合には。

マグレブにはアラブ語という書記言語の伝統が厳然として存在する。植民地支配が最も過酷で、マグレブ3国の中でもアラブ語教育が最も大きい打撃を被ったアルジェリアにおいても独立後は一環して教育のアラブ語化が推進されてきた（フランス語は外国語として小学校から学ぶ）。一見したところ、文学がフランス語で書かれる「必然性」は低い。しかし、一方でパラボラ・アンテナの普及で多くの人々がフランスのテレビを直接視聴し、フランスに移民した人々の行き来も与って、フランス語運用能力のある人の数が植民地時代よりはるかに増えているという皮肉な現象もある。現在も続く社会的混乱が終わりを告げ、またフランスとの関係が改善されて両国がずっと自由に行き来できるようになった時、フランス語で書くことをめぐる条件も変化するに違いない。様々な言語間の力関係が消滅することは「ユートピア」であるとしても、フランス語の「中心性」が不変であると信じる理由はない。変化を進めるのはもちろん文学だけではないが、現に存在し、増加し続ける多様な書き手による文学実践は、「中心性」を変貌させる動きの先頭を、豊かな想像力によって切り開いていくのではないだろうか。

モカデムの作品群もまた、この文脈の中で書かれ、読まれることになる。「本土」の求心性との関連で興味深いのは、モカデムの作品世界がパリも、またアルジェも経由しないことである。わずかの言及はあるが、物語はそれらの「中心」を全く必要としていない。これは任意でありうる舞台設定の間

題でもなく、また伝記的事実³⁴に還元できる問題でもない。砂漠の縁という「辺境」から出発して海を語るまで旅をした作家の目的地は「中心」ではない。それはまた、逆方向の原点回帰でもなく、中間地点を見つけてそこに留まることでもない。モカデムのテキストが示す動きには、それにふさわしい名が必要だろう。ノマドというメタファーは、魅力的ではあるがおそらく不十分である。確かに、モカデムの世界はゾフラの語りに始まり、現役のノマドも登場し、6作のうち4作は砂漠とその縁を主要な舞台としている。「ノマディズム」が意味するのは、しかし、ゾフラのいう絶えざる探求がないわけではないとしても、あくまで既知の空間の周回的動きである³⁵。モカデムが、この語り手を引き継ぐエクリチュールによって生み出そうとするのは、周回でも放浪でもなく、もちろん中心をめざす行程でもない動きである。あくまでも個人の動きでありながら、共同体の記憶と断絶はしていない。かといって、共同体の要請に飲み込まれることは拒絶する。これを指しうる正確な言葉はまだないように思われる。定住した「歩く人々」の娘はエクリチュールによって再度出発し、今度は動き自体を絶えず更新する歩みを、砂の上に、水の上に、紙の上に自在にのびていくだろう。

参考文献

Malika Mokeddem の作品

Les hommes qui marchent, Ramsay, 1990, Grasset, 1997.

Le siècle des sautrelles, Ramsay, 1992.

L'interdite, Grasset, 1993.

Des rêves et des assassins, Grasset, 1995.

La nuit de la lézarde, Grasset, 1998.

N'Zid, Seuil, 2001.

34 アルジェリアではオランの大学に学び、フランスでは最初パリに短期間住んだ後はモンペリエに移り、以後この地方に在住。

35 Hélène Claudot-Hawad の編による *Voyager d'un point de vue nomade*, Paris Méditerranée, 2002 は、ノマド（ここでは主にトゥアレグの人々）の目から見た、様々な種類の移動についての興味深い論考を集めている。

インタビューなど

Algérie Littérature/Action, No.14, octobre 1997.(France et Algérie)

El Moudjahid. 25 juin 1992.(Algérie)

Encres vagabondes, No.10, janvier-avril, 1997.(France)

La langue française vue d'ailleurs, Tarik Edition, Casablanca, 2001.
(Maroc)

Liberté, 10 mai 2001.(Algérie)

Le Quotidien d'Algérie, le 28 juin 1992.(Algérie)

Le Soir d'Algérie. 29 décembre 1991.(Algérie)

Variété Magazine, No.39, 5-11 juillet 1992.(Algérie)

モカデムに関する論考

Elbaz, Robert, "Entre mémoire et subversion: vers le dépassement de l'entre-deux négationnel chez Malika Mokeddem", in Beate Burtscher-Bechter et Brigit Mertz-Baumgartner(direction), *Subversion du réel: stratégies esthétiques dans la littérature algérienne contemporaine*, L'Harmattan, 2001.

Helm, Yolande Alice ed., *Malika Mokkedem. Envers et contre tout*, L'Harmattan, 2000.

以下の論文は上記に収録。

Aas-Rouxparis, Nicole, "Interdiction et liberté dans *L'Interdite* de Malika Mokeddem".

Bacholle, Michèle, "Ecrits sur le sable; le désert chez Malika Mokeddem".

Chaulet-Achour, Christiane, "Le corps, la voix et le regard; la venue à écriture dans l'oeuvre de Malika Mokeddem".

Crouzières-Ingenthron, Armelle, "Histoire de l'Algérie, destin de femmes: l'écriture du nomadisme dans *Les hommes qui marchent*,".

Hammadou, Ghania, "Réflexions d'une écrivaine".

Mortimer, Mildred, "Le Désert intérieur et extérieur dans l'oeuvre romanesque de Malika Mokeddem".

Orlando, Valérie, "Ecriture d'un autre lieu: la déterritorisation des nouveaux rôles féminins dans *L'interdite*".

Renaudin, Christiane, "Guérir, dit-elle": le double pouvoir de la médecine et de l'écriture".

Segara, Marta, "Paradoxe et ambiguïté dans *Le siècle des sauterelles*".

Merts-Baumgartner, Brigit, "Malika Mokeddem *N'zid*", in *Le Maghreb littéraire*, Vol VI, No.11, 2002.

その他

- Balzac, Honoré de, *Une passion dans le désert*, Gallimard, Pléiade TomVII, 1977.
- Barthélemy, Guy, *Fromentin et l'écriture du désert*, L'Harmattan, 1997.
- Bekri, Tahar, "Ecrire en deux langues ou le principe des vases communicants", in *Le Maghreb Littéraire*, vol.IV, No.7, 2000.
- Benoit, Pierre, *L'Atlantide*, Albin Michel, 1919. Edition de référence, 1993.
- Bonn, Charles et al., *Algérie: nouvelles écritures*, L'Harmattan, 2001.
- Boudjedra, Rachid, *Timimoun*, Denoël, 1994.
- Brahimi, Denise, *Requiem pour Isabelle*, Publisud, 1983.
- Charles-Roux, Edmonde, *Un désir d'Orient*, Grasset, 1988, *Nomade j'étais*, Grasset, 1995.
- Chaulet-Achour, Christiane, *Noûn*, Atlantica, 1998.
- Claudot-Hawad, Hélène, *Voyager d'un point de vue nomade*, Paris Méditerranée, 2002.
- Djaout, Tahar, *L'Invention du désert*, Seuil, 1987.
- Eberhardt, Isabelle, *Ecrits sur le sable, Oeuvres complètes Tome I et II*, Grasset, 1988 et 1990.
- Foucrier, Chantal, "Introduction" à *L'Atlantide*, Edition Livre de poche, 1994.
- Frison-Roche, *La piste oubliée*, Arthaud, 1950.
- Fromentin, Eugène, *Un été dans le Sahara*, Gallimard, Pléiade, 1984.
- Gast Marceau, "Mutations sahariennes", in *Désert, Autrement*, No.5, 1983.
- Gauvin, Lise, "Ecriture, surconscience et plurilinguisme: une poétique de l'errance", in Christine Albert et al. *Francophonie et identités culturelles*, Karthala, 1999.
- Grévos, Daniel, *Les méharistes français à la conquête du Sahara 1900-1930*, L'Harmattan, 1994.
- Henry, Jean-Robert, "Le désert nécessaire", in *Désert, Autrement*, No.5, 1983.
- Kessel, Joseph, *Vent de sable*, Edition de France, 1929.
- Laurent, Alain, *Désir de désert*, Autrement, 2000.
- Le Clézio, J.M.G., *Le désert*, Gallimard, 1980.
- Mammeri, Mouloud, "Ténéré atavique", in *Désert, Autrement*, No.5, 1983.
- ibid, *La traversée*, Plon, 1982.

- Maupassant, Guy de, *Au soleil*, in *Ecrits sur le Maghreb*, Edition présentée par Denise Brahim, Minerve, 1991.
- Memmi, Albert, *Le désert ou la vie et les aventures de Jubair Ouali El-Mammi*, Gallimard, 1977.
- Ousman, Sembene, *L'Harmattan*, Présence africaine, 1963.
- Peyré, Joseph, *L'escadron blanc*, Grasset, 1934.
- Roux, Michel, *Le désert de sable. Le Sahara dans l'imaginaire des Français(1900-1994)*, L'Harmattan, 1996.
- Saint-Exupéry, Antoine de, *Terre des hommes*, Gallimard, 1939,
- Soubias, Pierre, "Entre langue de l'Autre et langue à soi", in Christine Albert et al. *Francophonie et identités culturelles*, Karthala, 1999.
- Tournier, Michel, *La goutte d'or*, Gallimard, 1985.
- Vérité, Monique, *Odette du Puigau*, Editions Jean Picollec, 1992.
- ibid, *Le Sahara*, Favre, 1999
- Autrement*, No.5, *Désert*, 1983.
- Les Carnets de l'exotisme* "L'Exotisme au féminin", nouvelle série No.1, 2000, Editions Kailash et Editions le Torii.
- マリーズ・コンデ, 三浦信孝編訳『越境するクレオール マリーズ・コンデ講演集』, 岩波書店, 2001年。